

働き方の工夫

～限りあるリソースの有効活用～

◎梅田 由佳¹⁾
金沢市立病院¹⁾

「病院内で必要とされる微生物検査技師」とは、どのような技師像が浮かぶだろうか。培養検査工程の中で大きな時間的ウェイトを占める、検体処理を手早くこなす技師。グラム染色所見から起炎菌を推定、的確に同定・薬剤感受性検査を実施できる技師。コンタミネーションなく、同定菌名と薬剤感受性検査結果に矛盾がないことを確認し、正確な検査結果を報告できる技師。これらは現在我々が、ルーチン検査の中で適切な手技と知識・経験を基に日々行っている業務であるが、近い将来、自動化を推し進め人工知能（AI）を活用することによって、業務量の縮小が見込まれるであろう。この流れは我々のこれまでの働き方を見直し、今後急速に進む労働人口の減少を補うために必要な変化である。我々を取り巻く環境は次第に変わっていくであろうが、勿論変わらないこともある。それは微生物検査技師が「感染症起炎菌や院内感染対策上問題となる薬剤耐性菌の第一発見者である」ということだ。

では、「理想とされる微生物検査室」とはどのようなものだろうか。私が思うのは ①365日、24時間検査が進められ、②培養検査に適した検査材料を見極め、実施した検査の結果から感染症治療に貢献でき、③医師をはじめとした他職種と連携をとり、患者へより早く、最適な治療や感染対策をもって安全な療養環境を提供できる、というものである。①や③のマネジメントやコミュニケーションといった部分は、AIに置き換えることは難しい。②の適切な検査材料を採取するのはヒトであり、ロボットの技術革新が進んだとしても、どの部位からどのように採取するかを決定するのはヒトであり、教育やトレーニングが必要となることは、今後も変わらない。

とはいえ現実にはシビアである。手持ちのリソース（ヒト・モノ・カネ・時間）は限られている。当院は306床の中規模病院であるが、臨床検査技師数は正規12名、非常勤2名の計14名しかいない。2019年4月に労働基準法の改正により、それまで取得機会があまりなかった（取得できる雰囲気になかった）有給休暇の年5日取得が義務化され、2020年4月からは当院検査技師の休日勤務は日直から日勤体制へと移行し、平日に代休取得することとなり日中のマンパワーが絶対的に低下した。公立病院であるが故に、コロナ禍にあっても簡単に増員はされず、売り手市場の昨今ではスタッフの入れ替わりも激しい。多様な働き方のニーズが高まっていることから、男女ともに子育て世代の時短勤務取得も見慣れた光景となりつつある。また公立病院はコロナ禍のような特殊な状況を除き一般的に赤字経営であり、質量分析装置やマルチプレックスPCR装置などの高価で便利な機械は、病院上層部の理解なしにはとても手が届かない。

このような勤務環境の中、当院技師の個々のフレキシブルさは増し、検査室内部門間の垣根も著しく下がっていった。長期計画でのローテーションや短期トレーニングを行ってきた結果、限られた人員でも大きな負荷のない、365日に近い微生物検査体制をとれるようになり、休日・夜間においても全員がすべての培養検体処理を行っている。血培のグラム染色至急報告も深夜を除きほぼ全例で終日対応し、最初の陽性報告の後、翌日に6割、2日以内に9割の検体で同定・感受性試験結果を最終報告している。また2021年からは抗菌薬適正使用支援チームで「不適切な培養検査材料減少」に対し取り組んだ結果、血培汚染率は1%程度を維持、尿培の中間尿採取も9割以上で遵守されるようになり、医師に誤解や判断に迷うことが少ない検査結果を報告できるようになった。

リソースが限られていても、もともとある手持ちの武器（人材、検査機器）や機会（チャンス）を見逃さずに利活用することで、理想とする微生物検査室に近づくことはできる。学会当日は当院での具体的な取り組みを紹介する。参加者の皆様と意見交換し、これからの微生物検査技師と微生物検査室の付加価値を、さらに見出していきたいと考えている。